

阪神・淡路大震災から30年

「つなぐ・伝える」 バトンを未来へ

問い合わせ 政策推進課 ☎38-2127

阪神・淡路大震災の発生から30年。1995年1月17日に発生した未曾有の災害は多くの尊い命を奪い、まちを一瞬で変えました。当時を知らない世代が増える中、震災の記憶を未来に伝えることは重要です。

この特集では、震災の記憶の風化を防ぐとともに、震災を経験した世代が担ってきた活動のバトンを震災後に生まれた世代に引き継ぐことへの大切さを考えます。

最大震度7の激しい揺れ

1995年1月17日午前5時46分、淡路島北部を震源とする大きな地震（マグニチュード7.3）「阪神・淡路大震災」が発生しました。市内は最大震度7の揺れに見舞われましたが、この「震度7」という階級は1949年に新設されて以来、初めて適用されました。この地震は、内陸で発生したいわゆる直下型となり、破壊された断層付近で非常に大きな揺れを生じさせ、阪神地域から神戸市および淡路島北部に甚大な被害をもたらしました。

そのとき芦屋市の被害状況は？

この地震で芦屋市内では、死者444人、負傷者3,175人におよぶ被害が発生し、市内の建物の半数以上となる8,700棟余りが全壊・半壊と判定されるなど、壊滅的な被害を受けました。特に多くの木造住宅が倒壊し、早朝の発災であったために就寝中の市民が倒壊した建物や家具等の下敷きとなるなど、多くの命が失われました。また地震の影響で、水道・下水道・通信・電気・ガス等のライフライン施設が損壊したほか、芦屋浜の埋立地区を中心に広い範囲で地盤の液状化が発生し、市民の生活に大きな影響をおよぼしました。全市的に家屋が被害を受けたため、多くの方が長期にわたり避難所で生活し、その後も応急仮設住宅での不自由な生活を強いられました。未来へのバトンをつないでいくため、この震災から得られた教訓を活かすとともに、様々な可能性の想定も行いながら、今後の災害に備えることが重要です。



上宮川町 倒壊した芦屋アートセンター



本通り商店街

芦屋市の被害状況

■人的被害

死 者 452人
（他市で被災した犠牲者等を含む）
負傷者 3,175人
避難者 20,960人（ピーク時）

■建物被害

芦屋市域全建築物15,421棟
うち全壊・半壊棟は8,784棟（57.0%）



根元から倒壊した阪神高速神戸線



秋まつりでは復興を願い紙風船が放たれた

震災から復興へ

阪神・淡路大震災からの復興では、自然の厳しさを認識するとともに、人は自然に生かされていることを謙虚に受けとめ、人と都市を取り巻く環境を大切にしたい都市基盤の創出・市民文化の形成を目指すこと等を掲げました。そして21世紀を展望し、誇りと愛着を感じる国際文化住宅都市をつくるために、「快適で安全なまち」「自然と共生するまち」「人々のふれあいと文化豊かなまち」を目指して、復興に取り組むことを基本理念とし、防災計画の整備、救援・救護体制の整備、市民の防災意識の向上に関する取り組みを進め、今日の災害対応に引き継いでいます。

